

Mar. 20. 2010

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

News Letter

No. 9

日本電子キーボード学会ニュースレター ～日本電子キーボード学会「第5回全国大会」レポート～

目 次

1. ごあいさつ/西 義一、柳田孝義	2
2. 総会	3
3. 基調講演/古山俊一 「コンピューターと音楽 その魅力を探る」(文責 森松慶子)	5
4. パネルディスカッション 「ハードからみた電子オルガン演奏の新たな側面」 和智正忠、三枝文夫、森下絹代 (パネリスト) 柴田 薫 (司会)、海津幸子 (報告) 「M.L.授業のためのテキストを考える」 岡崎豊治、赤津裕子、脇山 純 (パネリスト) 富田英也 (司会)、森 直紀 (報告)	6
6. 研究発表 Room - 1 佐々木果奈、河村義子、前田栄子 野口剛夫 (司会・報告) Room - 2 金銅英二、諸井野ぞ美、三枝文夫 安藤恭子 (司会・報告) Room - 3 小倉隆一郎、坂本明子、森直紀/森崎貴敏 仁田悦郎 (司会・報告)	12
7. 研究コンサート 音楽専修柳田ゼミ、吹奏楽部有志によるハイブリッド・オーケストラ	17
6. 事務局から ・学会誌「電子キーボード音楽研究」原稿募集 ・第6回全国大会 ・メール情報 ・イスマ世界大会 ・編集後記	20

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/> E-mail : jeks@snow.ocn.ne.jp

第5回全国大会レポート

2009年11月8日、第5回全国大会が文教大学において次のスケジュールで開催されました。

- 10:30 あいさつ 西 義一 柳田 孝義
10:45 基調講演 古山 俊一
11:45 総会
12:00 昼食
13:00 パネルディスカッション - 1 (電子オルガン)
和智正忠、三枝文夫、森下絹代 (パネリスト) 柴田 薫 (司会)、海津幸子 (記録)
パネルディスカッション - 2 (M.L.)
岡崎豊治、赤津裕子、脇山 純 (パネリスト) 富田英也 (司会)、森 直紀 (記録)
15:00 研究発表
Room - 1 佐々木果奈、河村義子、前田栄子 野口剛夫 (司会)
Room - 2 金銅英二、諸井野ぞ美、三枝文夫 安藤恭子 (司会)
Room - 3 小倉隆一郎、坂本明子、森直紀/森崎貴敏 仁田悦郎 (司会)
17:00 研究コンサート 音楽専修柳田ゼミ学生と吹奏楽部有志によるハイブリッド・オペ
18:00 懇親会
以下、レポートです。

ごあいさつ

西 義一 (文教大学教育学部長)

本日は、日本電子キーボード学会第5回全国大会の開催、おめでとうございます。文教大学は越谷キャンパスに教育学部、文学部、人間科学部、湘南キャンパスには情報学部、国際学部、それに新しく認可されます健康栄養学部があります。教育学部は9つの専修から成る学校教育課程と心理教育課程があり、小中高校の教師、幼稚園教諭、保育士を目指す学生が勉強に勤しんでおります。今年教育学部は設置40周年を迎え、約1万人の卒業生を送り出してきました。音楽に関しては、音楽専修を中心とした、音楽を専門的に学ぶセクションと、教師に必要な音楽を学ぶセクションに分かれております。当大学では電子楽器は不可欠な存在であり、2つのML教室が様々な授業で活用されています。

また私は声楽を専門としておりますが、電子オルガンとの関わりはおおよそ30年以上前のオペレッタに始まり、東京室内歌劇場の演奏会で電子オルガン伴奏によるカンタータ等を歌いました。本日の研究コンサートでは、4曲が演奏されますが、シューベルト作曲、ベルリオーズ編曲の「魔王」を学生達と演奏いたします。

今回は電子キーボード8台とアナログの管弦打楽器、肉声とのハイブリッドの演奏でございます。クラシック音楽を語るとき、強弱と音色、そして倍音、響きが命と思われませんが、近い将来、これらのことが満たされた電子楽器の出現を望んでおります。

最後に日本電子キーボード学会の益々のご発展、またこの第5回全国大会が実り多き学会となることをお祈りしてごあいさつとさせていただきます。(文責：森松慶子)

ごあいさつ

柳田孝義 (日本電子キーボード学会代表幹事)

この学会も今回で第5回目の全国大会を迎えました。本日の基調講演では、「コンピュータと音楽」というテーマで、古山俊一先生にお話し頂けることに感謝しております。今日コンピュー

タは、音楽の表現や教育においても重要な手段として使われていることに、もっと眼を向けなければなりません。こうした事柄を私たちがどのように研究対象として取り上げ、今後の発展に寄与し、次代につなぐことができるかが肝要です。その意味で、本日の基調講演は大変興味深いものと存じます。

基調講演の後、パネルディスカッション、研究発表がございます。今後の研究の参考にして頂ければと思います。研究コンサートでは、本学音楽科の学生が演奏する8台の1段電子キーボードに、吹奏楽コンクール全国大会で金賞を受賞した本学吹奏楽部の学生が加わったハイブリッドオーケストラで演奏されます。このようなコラボレーションは、本学会でも初めてではないかと思えます。

またイスメ（国際音楽教育学会）の世界大会が来年8月に北京で開かれますが、その世界大会で、昭和音楽大学の電子オルガンアンサンブルの実績が評価されて大会コンサートの演奏グループとして選ばれました。これもこの学会にとって喜ばしい研究成果であり、ご報告申し上げます。

この夏デンマーク、スウェーデン、ノルウェーの音楽大学を訪れました。私の専門は現代音楽ですが、北欧では大学で電子キーボードやコンピュータを重用していると実感しました。ストックホルム王立音楽院では、作曲科の学生は2年間電子音楽の必修授業を受けます。社会に出て作曲活動をするときに、電子音楽やプログラミングができるのが当たり前となっておりました。また、そこで使われている楽器や電子機器はほとんどが日本製であり、日本では当然こういったものが大学でももっと使われていると思われていました。本学会も、電子オルガンやMLに留まらず、世界の研究者との交流も含めてコンピュータ等も含めたデザインを考えていきたいと感じました。本日は、夕方まで実り多き時間をお過ごしください。（文責：森松慶子）

第5回総会

総会は議長選出の後、2008年下半期と2009年度上半期の事業報告、2008年度の会計報告・監査報告の報告事項に続き、2009年度下半期と2010年度上半期の事業案、組織および運営第8条、第6回全国大会候補地についての協議が行われた。



総会会場

組織と運営に関して、会則第三章の第8条(3)、第11条の変更と新たに第15条が加えられました。

- ① (3)の10名の中に代表幹事と副代表幹事が含まれることを明記
- ② 現行のままで行くと、2010年の選挙で現在の役員の大半が入れ替えとなり、幹事会がスムーズに機能しなくなる恐れがあるとの考えで、再任は妨げなく連続する二期を超えることができるとした。ただし代表幹事は連続する二期を超えることはできない、と改めた。また、任期の期間も明記
- ③ 第15条として、新しく名誉幹事の条項を設けることが承認され、学会設立に多大な貢献をされた高萩保治東京学芸大学名誉教授、イスメ名誉会長が名誉幹事に推挙され、承認された。

現	新
<p>第三章 組織および運営</p> <p>第8条 本会に次の役員を置く</p> <p>(1) 代表幹事 1名</p> <p>(2) 副代表幹事 2名</p> <p>(3) 幹事 10名</p> <p>(4) 会計監査 2名</p> <p>第11条 本会役員任期は二年とし、再任を妨げないが、連続する二期を超えることはできない。</p>	<p>第三章 組織および運営</p> <p>第8条 本会に次の役員を置く</p> <p>(1) 代表幹事 1名</p> <p>(2) 副代表幹事 2名</p> <p>(3) 幹事 代表・副代表を含め10名</p> <p>(4) 会計監査 2名</p> <p>第11条 役員任期は二年とし、再任を妨げないが、代表幹事は連続する二期を超えることはできない。</p> <p>2 任期の期限は、選任された年度の12月1日より次の選挙実施年度の11月末日までとする。ただし任期の途中で交代した役員任期は、残余の期間とする。</p> <p>第15条 本会に名誉幹事を置く。</p> <p>2 名誉幹事となる者は、本会の運営に特に寄与した者とする。</p> <p>3 名誉幹事は、幹事会が選任し総会に報告する。</p> <p>4 名誉幹事は、会の運営に助言する。</p> <p>5 名誉幹事は、幹事会の要請に応じ会に出席し意見を述べることができる。</p>

第6回全国大会開催校

総会時には、昭和音楽大学で10月または11月の日曜日ということで承認され、後日次のように決まりました。

とき：2010年10月8日(日)

ところ：昭和音楽大学南校舎 神奈川県川崎市麻生区南麻生1-11-1

小田急線新百合ヶ丘下車4分 新宿から快速急行で23分

基調講演要旨 コンピュータと音楽 その魅力を探る

古山俊一（尚美学園大学教授）

“コンピュータ”は日常のコトバとなっており、もはや当たり前の生活の道具となっているが、音楽でコンピュータを使う事は今もそれほど一般的ではない。ただし、音楽とコンピュータの結びつきはかなり古く、1950年代に遡る。当時のコンピュータは非常に大きな機械でこれを作曲に使おうとは普通の人は考えなかったが、世の中には面白い人がいて、これで音楽をやってみよう、とイカダで海に漕ぎ出すような試みが始まった。最初は一部の研究者が自分の目的に合わせてプログラムを書き、コンピュータを使っていた。パーソナルコンピュータが登場し、メモリの容量が増して演算速度も速くなることで、誰もがコンピュータを音楽に使う環境が整い、そのためのソフトウェアも開発されて現在に至っている。私が小学生の頃はコンピュータは空想の世界のものだった。大学ではコンピュータの基本的なプログラミングを教わったが、実用的なものというよりは、書いた式が正しいかどうか見てもらう、というようなものだった。自分でいろいろ試してみて、コンピュータで絵を描くのも音を創るのも大変だ、しかしとても魅力的だ、と感じた。その頃から考えてみても、コンピュータはここ20〜30年で非常に急激な進化を遂げている。

コンピュータを用いた音楽は、4つのタイプに分けられる。

タイプ-1 コンピュータによる作曲

最初期のコンピュータには音源がついてなく、コンピュータに作曲のルールをプログラミングし、乱数を発生させ、ルールに外れた結果は除外することを繰り返し、その結果を楽譜化して人間が演奏した。有名な「イリアック組曲」も普通の弦楽四重奏のように聞こえるが、コンピュータによる作品。

タイプ-2 コンピュータによる自動演奏

コンピュータの中に簡単な音源が入っており、人間の代わりにコンピュータに演奏データを入れて演奏させる方法。後にMIDIに発展する。マックス・マシューズという作曲家の「マスカレード」は1960年代初期のコンピュータの自動演奏による作品。

タイプ-3 自動作曲・作曲支援

例えばメロディを入力し、コンピュータがそれにコード付けする、という遊び感覚で作曲できるものもあれば、確率、フラクタル、カオス等々の数学的理論を用いて自動作曲するものもあり、よく使われている。

タイプ-4 音響生成・音響編集（ライブエレクトロニクス）

電子楽器の中はコンピュータそのものであり、様々な音響を生成し、それをシーケンサーに乗せることで面白い音楽を作ることができる。また音響編集でエフェクトをかけることなどはライブエレクトロニクスと呼ばれるものにもつながっている。音響生成と編集には次のような方法がある。

- ① FM音響合成：今回は先述のマックス・マシューが作ったソフト上で実演している。モジュレーションをかけるなどしていろいろな音が作れる。昔は膨大な機材を要したが、今はコンピュータの性能がアップし、価格が下がったお陰で、手軽な機材でほぼ即興的に実演することができる。
- ② サンプリング：音をデジタル録音して再生する技術。メモリが贅沢に使えるようになってから可能になった方式。いわば、ミュージックコンクレートをコンピュータの中で行うようなもの。
- ③ モデリング：管や弦の振動のような物理現象、さまざまなパラメータによる変化を数式化し、実際に音として鳴らす方式。コンピュータの演算能力が向上し、近年漸く製品化されてきた。

今の学生は、iPhone用のプログラムを書いて録音したり作曲ツールとして使ったりしている。コンピュータは今後も益々身近で高性能な嬉々となるだろう。また、映像とのメディアミックスも見逃せない。今後より解像度が高く、よりコンパクトで、より安価なものへと進んで行くであろう。コンピュータと音楽の世界は常に過渡期であり、それがこの世界の面白さでもある。教育や創作にも有効に活用されることを望んでいる。（文責：森松慶子）

パネルディスカッション - I
テーマ「ハードからみた電子オルガンの新たなる側面」
～演奏の現状に対する課題と提案～

パネリスト

和智正忠（元ヤマハ株取締役） 三枝文夫（株コルグ取締役） 森下絹代（電子オルガン演奏・指導）
司会・進行：柴田 薫（昭和音楽大学） 記録：海津幸子（昭和音楽大学）

パネルディスカッションIは、司会者からテーマ「ハードからみた電子オルガンの新たなる側面」を選んだ理由とパネルディスカッションの進行についての説明後に「モデルチェンジ」をキーワードに、3部構成で1部がパネラー発表、2部がディスカッション、3部がまとめで行われた。

第1部 パネラー発表

和智正忠パネラーから、デジタル化とそれ以降のモデルチェンジについて次のような話があった。

1. 電子楽器はデジタル化により、インターフェイス、メモリー機能、シーケンス機能の3点で大きな転換を迫られた。
2. デジタル化当初は企業間の競争もあり、限界ある選択の中で最大公約数的に機能を搭載する傾向が見られたが、徐々にモデルチェンジによる操作性を配慮し、無意味な変化を可能な限り回避する方向に変化していった。
3. 製作者とユーザーとの意見交換は大切である。

森下絹代パネラーから、演奏者の立場でのモデルチェンジへの対応についての話があった。

1. モデルチェンジのたびに音楽を創った時間・行為・精神に対する消失感はあるが、電子楽器における変化は当然のことであり、奏者としてどう取り組んでいくかが大切である。
2. 音楽をする動機は楽器には依存しておらず、楽器に左右されない部分で自分の音楽を見つめて表現する姿勢が大切である。
3. 楽器としての不十分さは奏者として不満ではない。

三枝文夫パネラーより、電子楽器にとってのモデルチェンジについて以下のような話があった。

1. 進化・変化は電子楽器の特徴であり、必要善である。
2. シンセサイザーはインターフェイスに鍵盤を取り入れたことで楽器として認知され、鍵盤の枠の中での音楽、ポリフォニックな和楽器となった。また、メモリー機能によってメーカーが作った色をどう利用するかという発想に変わっていった。

ディスカッション

中島：バージョンアップは「善」「悪」両方の観点で捉えて欲しい。作者の感性の忠実な表現とその持続性がユーザーのニーズであり、電子楽器は過去の遺産を活かせ、新しいものであって欲しい。

和智：かつてデータの継承は考慮外だったが、徐々に改善されつつある。モニタリングは音楽教室周辺や、開発途中での演奏家による試弾によって行われて来た。ポータブルキーボードに関しては、開発途中の店頭での試弾により客のニーズを吸い上げる等の方法もとられてきた。

三枝：現物が無い状態でのモニタリングは難しく、実際に触れることで意見が出てくる。また、演奏家によって意見が全く異なることもあり、それらを平均化するとつまらない楽器になる。明確なポリシーを持って楽器を製作することが大切である。

神山：以前の楽器は人間臭い音がした。デジタル化で音色はシャープになったが、モデルチェンジしていく上での哲学はどのようなものか。

- 和智：楽器は音楽するツールであると同時に企業にとってはビジネスの対象であるが、電子オルガンは電子オルガンとしてのアイデンティティを守りつつ、新たな素材や加工技術、コンピュータ技術を取り入れて発展してきた。当初から精密さを求めて開発を続けてきたが、逆に人間臭い音は永遠のテーマであり、電子楽器の未来にとって見直す必要があるのではないだろうか。
- 三枝：アコースティック楽器に似ていない音であっても、昔の音が良かったという意見はあり、製作者はそういった意見にも謙虚であらねばならない。
- 森下：現在のエレクトーンは複雑でユーザーの大半はエフェクトの意味を理解せずに使用している。理解できる部分が多いことが人間臭さに繋がるのではないだろうか。今は多様な機能の中で切り落とす部分が多く、自分の音楽に必要な部分のみを使っている。すべてを使う必要はなく、音楽にとって必要な部分だけ使う。
- 小熊：エレクトーンのリモコンが突然変わる、あるいは一世代前のリモコンを採用するのはどういうことか。
- 和智：進化の速いメモリーへの対応は難しい。最近はネット機能も活かし、複数のメディアを並列して使用するようになった。
- 三枝：電子オルガンの中に入っている IC も急速に変化し、モデルチェンジせざるを得ない。
- 安井：モデルチェンジは一般の人には難解なもの。モデルチェンジ時にどの楽器にも共通する操作性を考慮していたか。メーカーを超えての操作性のスタンダードについてどう考えていたのか。
- 和智：音楽電子事業協会によって MIDI, GM 規格の共通化は実現したが、操作性についての議論はなかった。鍵盤にはある程度の共通化が見られ、ヤマハにおいて鍵盤幅はエレクトーンとシンセサイザー、電子ピアノとピアノは共通。ポータブルキーボードは2種類あり、シンセサイザー仕様と子供の手に合わせて狭いものがある。パネル面に表示される言語はそれぞれの楽器固有の表現になっている。コンピュータにおいてウィンドウズはマイクロソフト1社が供給しているが、電子楽器はメーカーが複数存在し、操作性の統一は実現できていない。
- 三枝：GM 規格決定時に決めること自体の是非を問う議論があったが、規格統一があったため結果として浸透した。アメリカでは各社の規格を全部認知し、市場原理にまかせ自然淘汰を待った。不統一による不便さはあるが、メーカーの独自性を活かしたい面もある。

まとめ

- 柴田：今回初めてハードとソフトの交流があり、意見交換の大切さが明確となった。まだ両者の考えに時間差があるが、今後この時間差を埋めていけるのではないか。本学会としてこの課題を継続審議し、ハードとソフト双方向への発信の場として存在価値を発揮していきたい。



パネリスト：左から和智正忠、森下絹代、三枝文夫の各氏



パネルディスカッション - 1会場風景



研究発表 (M.L.) の小倉隆一郎 (大会実行委員長)



研究発表 (M.L.) で質問する吉田泰輔 (前代表幹事)

パネルディスカッションⅡ
テーマ「ML 授業のためのテキストを考える」
～伴奏づけや鍵盤楽器基礎技能などを中心に～

パネリスト

岡崎 豊治（札幌幼児保育専門学校） 赤津 裕子（竹早教員保育士養成所） 脇田 純（平成音楽大学）
司会・進行：富田 英也（白鷗大学） 記録：森 直紀（昭和音楽大学）

パネラー発表

岡崎豊治パネラーから、初心者に対応できる伴奏編曲とテキストの活用～「こどもうたひきうたい」と ML 活用の意義～について、以下の内容で述べられた。

1. 「こどもうたひきうたい」指導のねらい

- ① 以前は「バイエル」を教材として使用していたが、実際に保育の現場で求められている「こどもうた」を題材として、ピアノ演奏技術や歌唱力を身に付けさせる指導法に切り替えた。3年間の準備期間を経た後にテキストを作り、内容の精査を行った。
- ② コードネームは使用しない。また簡易伴奏形のみにしらないなど、編曲や指導法を工夫している。
- ③ 岡崎氏編曲による全200曲を3年間で全曲演奏を目指す。全3冊を1年間に1冊ずつ終了する。

2. 指導の目的、内容、方法（職業教育を基本に据えた専門学校として）に関する共通認識

- ① 教育現場で広く一般に扱われている「こどもうた」を指導できる保育士を育てる。
- ② 弾きやすい編曲により、学生が教材・題材そのものが現場に直結していると実感できる。

3. 特に指導法について

- ① 「目で弾く」「頭で弾く」「体で弾く」をキーワードとして、効果的な学習・練習を積み上げる。
- ② 全体指導では特に読譜指導の段階において、ML 利用の意義は極めて大きく、不可欠である。
- ③ 個別指導においても、ML の効果は極めて高い。
- ④ 初心者と経験者別に必修曲数、試験課題曲を設定し意欲を高める。
- ⑤ 学習成果を確認するため「確認表」を作成している。

4. まとめ

学生は「こどもうた」の必要性について実感しており、積極的に取り組んでいる。昨年度は卒業生53名中20名が全曲演奏を果たし、「こどもうた」がテキストとして十分な成果を上げていると実感している。今後もよりよい内容に改訂を重ねていきたい。

5. 添付資料

- ①「こどもうた」譜例 ②平成20年度「こどもうた」試験曲 ③音楽教程表

赤津裕子パネラーより、個人差に応じた伴奏づくり～アンサンブル用教材・テキストについて～、以下のような説明があった。

竹早教員保育士養成所では音楽に関する授業は複数開講されている。

ピアノ個人レッスン：1年次 必修 2年次 選択（進路が遅れている学生）

音楽教育全般に関する授業：1・2年全員必修（32台のML教室使用）

今回は2年生を対象としたMLを扱った授業の中から伴奏づけとアンサンブルについて説明された。

1. 学生の自発的学びをめざすテキストの内容とは

- ① 学習目的がはっきりしており、将来に役立つ
- ② 課題が学習者のレベルに対応できる
- ③ 楽典などの面でもわかりやすい
- ④ 別の課題に応用できる
- ⑤ 楽しめる

2. 伴奏づけにおける内容と評価

- ① 楽譜どおりではなく簡単に伴奏がつけられることをめざしている（個人レッスンで楽譜どおり弾くことが求められている）
- ② 伴奏の方法として、コードのルートによる伴奏・和音による伴奏・両手伴奏の3つのパターンを柱としている
- ③ 一つの楽曲に対して色々なつけ方を学び、自分の表現したい曲想に応じた伴奏を工夫させる
- ④ 学生の理解度については、巡回指導・フロッピー提出・発表・過程表の記入から評価する

3. アンサンブル指導

- ① 伴奏づけで学んだことのまとめの意味をこめてアンサンブル活動に取り組んだ
- ② 方法としては、4名のグループで、自由に選曲をさせ、自分たちで編曲させた
- ③ 教えあい、音色・曲想を工夫、合わせることの難しさと楽しさを学んだ活動となった

4. 課題

- ① 初心者へのわかりやすい説明の工夫
 - ② 現場で使用できる教材の選曲と曲目のレベル順の決定
 - ③ アンサンブル教材について、学生の実態に合った編曲
- *最後に実際のアンサンブル授業風景の映像“やさしさに包まれて”が紹介された。

脇山 純 パネラーより、音楽大学におけるMLを活用するためのテキストについての紹介があった。

現在「キーボードハーモニー」の授業でML教室を使用。テキストは現在複数の既成の楽譜・音楽ソフトより選択し自作プリントを配布する形で行っている。

1. 授業の特色

- ① 「視覚」「聴覚」など全感覚を総動員させ、音楽の再生・再現力を高める
- ② ML教室による個人授業とクラス授業の同時進行により、マイペースの個人練習と説明の時間の共有を図る
- ③ 学生に確認表を提出させながら繰り返し学習させ、学生の理解度を確認する

2. テキストの特色

- ① 市販のソフト「シベリウス」「フィナーレ」「ロジック」などから選択して作成
- ② 作成についてはかなり労力を要するが、板書にかかる時間が短縮可能
- ③ テキストの添削ページの提出により毎回の授業のフィードバックと理解度のチェックが可能

3. テキストの紹介

- ① 「キーボードハーモニーⅡ」の第1回から第5回までのテキストより、パソコンの画面をホワイトボードとして使うように作られたデータを資料として配布
- ② プロジェクターに写された実際のテキストデータを操作しながら、設問に対する回答を一瞬に表示できるなど、授業運用に有効な多くの利便性を紹介

4. 今後の展望

やはりテキストは自作のものが一番であると感じる。制作の労力やコストの点を考えると今後はインターネットなどを通して複数の指導者が知恵を出し合ってテキストを作成し、E-ラーニングに発展させて全国的に共同で活用できる様になれば理想的であろう。

ディスカッション

小倉→岡崎：テキスト「こどもうた」の編曲は？

岡崎：200 曲すべて私自身が行っている。ミュージックソフトについて、「フィナーレ」や「シベリウス」などは使いにくいと感じているが、より簡便で廉価なソフトはないか？

不明：「ミュージックプロ」のヤマハ仕様版「テロミンフォーケンシー」が良い。

富田→岡崎：「こどもうた」までの導入指導法は？

岡崎：最初は体育館で歌を徹底的に教えてから、ML 教室で初心者にわかりやすい説明をした後、区切って反復練習している。

富田→岡崎：初心者に最初からこの教材を使用しているのか？

岡崎：1 年目から使用。この教材を弾きこなせれば、「バイエル」程度は弾ける力が付いている。

富田→赤津：「バイエル」についてどのように考えておられるか？

赤津：採用試験の場で「バイエル」課題となっているので、必要と感じている。また「バイエル」で演奏能力は身につけられているが、中には好まない学生もいるので、検討課題とはなっている。

森→赤津：「バイエル」は標準版のみを使用しているのか？

赤津：本校では、全音の標準版のみを使用している。

不明→学生は楽器を所有しているか？

岡崎：ほとんど持っていないので ML 教室で自習している。

小倉→脇山：学生へのイーラーニング化はすでにされているのか？

脇山：現在まだ行われてはいないが、時代の流れもあり将来的に希望している。

岡崎：「バイエル」の使用に関して、大学と専門学校で状況は違うであろう。専門学校では「バイエル」に固執するよりもより多くの実践的課題が必要である。

赤津：個人レッスンで「バイエル」を指導しつつ「子どものうた」の指導も必修で行っているので、両者を総合しながら学生は十分力を付けられている。

出田：今回幼児科において、従来の伴奏譜にとらわれない教材の選択を試みられていると感じ大変喜ばしく感じた。さらにこれからは新しいレパートリーも取り入れて欲しい。

富田→全員：音楽大学での個人差に対する対応は？

脇山：能力差に応じて片手、部分練習のなど個人指導で対応している。

出田：各音楽大学でも学生の多様化に即して、専門家向け、一般向けと教育内容も多様化してきている。ML は、そのような現状に対応できる施設なので活性化を期待したい。

赤石：ソルフェージュ教育においても、学生の専門性に依って聴音や伴奏付けなどの内容に柔軟性を持たせてより実践的に指導している。

脇山：進度の速い学生に対しては、さらに難しいレベルの内容も取り入れて指導している。

まとめ

富田：今回の ML 分科会パネルディスカッションでは、保育・大学と立場の異なる現場での ML テキストに関する現状を知るよい機会であった。今後も検討課題としていきたい。

岡崎：これからも幼児教育と専門家教育のそれぞれの連携を高めていくべきであろう。

赤津：今回話題になった「バイエル」については、これからも現場において教員同士で検討を重ねていきたい。

脇山：それぞれの先生方の熱意が感じられた。何よりも積み重ねが大事だと感じるので、今後も研究発表を楽しみにしている。

富田：皆さま方のご協力に感謝する。今後も学会としてテキストのあり方の検討に邁進していきたい。

※ アメリカ・イーストマン音楽学校の ML 授業に関する参考資料（阿方先生提供）が配布された。

研究発表 Room-1(12号館 12102号室)

司会・報告 野口 剛夫

研究発表① ハイブリッド・オーケストラの現状と課題

佐々木果奈(昭和音楽大学)

私立の音楽大学のほとんどでは、弦楽器の学生に対して管打楽器の学生が圧倒的に多い。そこでオーケストラの授業において、弦楽器のパートを電子オルガンに弾かせるという試みが始まっている。本発表は、昭和音楽大学におけるレポートであった。

2007年度から始められたこの授業、3年目を迎えた本年では、学ぶ作品の数、参加する電子オルガン学生も増え、徐々に充実してきているようだ。授業で指揮・指導を担当する教員(元オーケストラの管楽器奏者で現在は昭和音大で教鞭をとる)からも、この形態による合奏が、管打楽器のオーケストラ訓練には有効であるという、一定の評価をもらっているようだ。

本発表では、上記のことが詳しく図表化されていたし、授業の様子や、教員へのインタビューなどを、実際の映像で見られたのは興味深かった。ただ、ビデオを見るのにかなり時間を取られてしまい、それらの現状や意見を踏まえて、電子オルガン奏者の側では、どんな対策、工夫をしようかというあたりの考察が十分に示されなかったのは残念である。

筆者には、このままのやり方だと、管楽器の学生には勉強になるものの、電子オルガン側には消化不良で終わってしまう危険もあると感じられた。現状の授業の形態が、あくまで管打楽器の側から発想されているものだからだ。そこに参加する電子オルガン奏者が、弦楽器の奏法の研究を深めなければならない。また場合によっては、従来の弦楽器の表現を超えた現代の楽器としての主張もできなければいけないのではなからうか。そうでなければ、ハイブリッド・オーケストラで、電子オルガンは弦楽器の代用としてなんとなく使われて終わってしまうと思う。本発表者のみならず、同じような試みをしている人々のさらなる奮起が期待される。

研究発表④ 単旋律による電子オルガンオーケストラへのアプローチ

ーエレクトーンステージアとピアノタッチの関係を通してー

河村義子(かすみの会)

発表者は幼稚園や学校への出張コンサートを行ううちに、エレクトーンを導入したアンさんブルの魅力と有効性に開眼したという。発表者も電子オルガン奏者の前にピアニストであることが注目される。「持続音の表現を電子オルガンを通して研究することで、ピアノを弾くことに役立てたい」と、便利な機能はあえて封印し、メンバー各人がオーケストラの1パートに集中する単旋律演奏の研究にこだわる。電子オルガン奏者は、つい何でも一人で、両手両足を駆使して弾いてしまいがちなので、貴重な視点を提供してくれている。

実際の演奏会の様子も映像でいくつか鑑賞でき、奏者の意気込みと演奏のコンセプトは強く伝わってきた。生のヴァイオリンと共演する際は電子オルガンと音程を融合させることや、オーケストラとしての各パートのバランスなどに課題を感じたのも事実であるが、それは指揮者を入れるなどすれば解決されるだろう。ただ、発表内容にはいささか自画自賛的な調子が散見された。オーケストラと名乗る以上は、伝統の重みに対して、またその継承の責任をも負う者として、これからは謙虚に音楽を追求していただきたいものである。

研究発表⑦ アジア・パンパシフィック電子オルガン交流週間のもつ意義

前田栄子（昭和音楽大学）

当初、清水徳子氏と二人による発表が予定されていたが、前田氏一人が発表した。内容は、6月下旬に上海で、中国、日本、韓国、台湾、アメリカの参加者により行われた電子オルガン週間のレポートであった。

「即興演奏ワークショップ」「研究発表」「交流コンサート」「ラウンドテーブル」「学生交流会」の様子が手際よくビデオで紹介された。欧米などとは逆に、中国、韓国のような「電子オルガン新興国」では、この楽器を使った音楽活動はこれから隆盛を迎えつつあるようだ。特に中国では、ヤマハ製の電子オルガンだけでなく、それに似て価格も低廉な国産電子オルガンも普及しつつあるようで、彼らの演奏も演奏会の盛り上がり方も、日本では味わえない熱さを感じさせた。

本発表はほぼここまで紹介したところで、ボーダーレス、エイジレスな多種多様の交流の促進を訴えて閉じられたが、この現状を踏まえた発表者のより深い洞察が聞きたかったのも事実である。

決して未来はバラ色ではない。何でもありの楽器に好き勝手にさせておいた結果、わが国の電子オルガン界は「バベルの塔」のような混乱と閉塞に見舞われてしまった。例えば、この教訓を勇気を持って外国にも伝え、いずれ訪れるであろう危機に備えてもらうことも必要ではないか。国際交流の今後のあり方についても、いろいろと考えさせられた発表であった。

研究発表 Room-2（12号館 12103号室）

司会・報告 安藤 恭子

研究発表② 映像から検証する電子オルガン（オルガン）の音楽表現について

金銅 英二（松本歯科大学）

今回の発表のテーマは最終章：必見！映像からみる～と題し、過去の発表に続き、歴史的なことに基づき、ショパンのピアノ曲「革命」を電子オルガンで演奏する際、どんな音色、どんなアレンジで演奏されますか？またどんな演奏をイメージされますか？と問いかけ、具体的に演奏映像を通しての解りやすい発表であった。

毎回、氏の発表を拝聴する機会が無く、過去の発表や論文を再読させて頂き、氏の論じてこられた楽器自身のアイデンティティーの重要性などをあらためて考える時間を持つことができた。

始めの衝撃的な映像と音源は、ニューヨークのウォール街にあるトリニティー教会にあるパイプオルガンを駆使してのショパンのピアノエチュード第10番「革命」の演奏であった。瞬きを忘れるほど見入ってしまった。

聴こえてくるのは紛れも無く現在の電子オルガンの音色ではないが、豊かな彩りが見えてくるような新鮮な音色であった。普段、取り組んでいる自分自身のエレクトーン音色に対する認識を、まったく新しいメニューに替えていける勇気を頂けるほどの刺激があった。

またバッハのフーガの部分映像では、内声の旋律を浮きたたせるために、敢えて多旋律にし、コントラストをつけた演奏を観た。音色を足していく、また引いていくことにより音色替えをその意味で使っている。ビゼーのカルメンの演奏も、オーケストラの代わりとなるようにも思えた。

氏の資料によると、2001年9月11日同時多発テロによりこのトリニティー教会のオルガンも打撃を受けオルガンの再建が必要になり、再建には膨大な費用と時間を要するため電子オルガン（パーチャルパイプオルガン）を導入されたというのだ。

次のミュージカル映像ではどこか懐かしい音色と音楽に触れた。ステージ中央に位置する Hammond

オルガン楽器自体が演奏者と、まわりの出演者と共演しているかのように思えた。

発表者は、電子楽器そのものや演奏準備段階を複雑化させるだけではなく、演奏者が音楽との会話に到達できるように、リアルタイムで楽器の可能性を引き出せる術を備えなくてはならないと論じていると考える。

研究発表⑤ 電子オルガンのためのエチュードあり方を考える

諸井野ぞ美(昭和音楽大学)

発表者自身の電子オルガンの指導の中で、特に今の子供達の練習内容に着眼し、また、ご自身の練習の必要性も抱かれた結果、ストレッチ的ないわゆる練習課題を書き溜められてきて、集大成といふべき素晴らしい作品集について発表された。

様々なテクニックを身に付けるための第8集から成る「Preludes for the Electronic Organ」(電子オルガンのためのプレリュード)である。

ヤマハから市販されている教則本もあるが、出版曲集は、初心者から指導者まで幅広く使用できるように考えられていて、アーティキュレーション・テンポの安定・レガート奏など至れり尽せりの細やかな指導書であり、音楽的にも豊かな表情を引き出してくれる楽曲ばかりで、筆者は、宝石箱を開けたような、ときめきを感じた。

電子オルガンでの音楽を続けていく上で、「作曲」「編曲」「音色」は、「楽器」と共に試行錯誤していく「時間」の中での大量の「作業」である。音楽を楽しむ達成感を得る為に、また、今以上の「感動」を求めていく為に、他楽器では有り得ない労力が付き物であると考えます。

しかし、その「時間」ばかり費やすことに「不安」を感じるのも同感である。すべての楽器演奏には、「練習」無くしては技術・表現力の向上は無い。電子楽器に対しての研究書、電子オルガンと多楽器との共存の論文を多く見る事はあっても、電子オルガンの為のエチュードは溢れんばかりに実在している訳ではない。

発表者はピアノ練習曲とも比較されているが、2段鍵盤ともうひとつの鍵盤であるベースの存在、そしてエクスペッションペダルを操作するという多楽器にはない演奏スタイルはこの楽器の特徴であり、また、それ故に、この楽器ならばこう練習するべきというテクニックの身につけ方を指導していく専門練習曲が必要なのは当然であると論じている。

加えて「練習する」ということに関するアンケート調査を実施され、集計結果をまとめられた。電子オルガンに携わる人たちは「練習」をイメージ的にどう捉えているか、どのような練習内容かなどの質問に対して興味深い回答がたくさんあった。ご紹介できないのが残念である。

筆者自身、電子オルガン演奏に必要な体全体の身体運動での表現、タッチトーン等を駆使するフィンガーセンサー表現とでもいえる細かい部分までのテクニックをこのプレリュードを通じて、あらためて再考するきっかけを頂けたことを感謝します。

研究発表⑧ どこまで真似るか真似ないか・・・電子鍵盤楽器の100年

三枝 文夫(株)コルグ

楽器本体の音色が他のアコースティック楽器のどこまで真似るべきか、真似ないで電子楽器独自の音を目指すべきなのかをあらゆる角度から検証し、また実在した楽器等を紹介されながらの発表であった。製作者側としての想いも含め、その2つが共存していることも述べられた。

100年前に特許を取ったテルハーモニウムは電話回線に電子音楽をのせ家庭に配信する電力伝達による音楽配信サービスで、このような粋な電子発信がそんな時代に存在した事に驚く。テープに録音したものを発したオルガンやサンプルから音をとりにこみ演奏者が真似てそれを機会が真似をするなどとても興味深い実例を挙げられた。

最も印象に残ったのは、60数年前の「電子楽器に就いて」という論文紹介である。既存の楽器の代用品ではなく独自の性質を有するまったく新しい楽器であるから技術が必要になる。この楽器の為の作曲が必要になる。このフレーズである。

また、電子楽器の発達も関わる音楽家たちの積極的な協力が必要で、新しき時代の感覚が新しき電気音楽で表現されるのも程遠くないであろうと締めくくる。

現在も、現在に至っているから、尚更、独自性を追求していこうとしている昨今である。真似ることはそのもの自体を再現できることではなく、似せるということであるから、真似る事も技術、ひとつの固有の音色ではないかと考える。編曲者独自のアレンジにより生み出される音色はそれなりの輝きを持ち、聴き手に発信していくのではないだろうか。

電子楽器独自の音を持つことを突き詰めていくのは、永遠の課題であり、誰をもが固有の音であると満足する音色を産み出すのは、技術者側からか、演奏者側からなのか・・・

研究発表 Room-3 (5号館 516号室)

司会・報告 仁田悦朗

研究発表③ ML 授業における授業カリキュラムの見直しとその効果

小倉 隆一郎 (文教大学)

本発表では、まず M.L.を活用した授業を通してピアノの基礎技能を養成する上で浮かび上がってきたさまざまな問題点を解決するための施策として、学生が自ら学ぶ意欲を喚起することが重要であると考え、そのためには①課題の提示方法の見直しと②テキストの進め方の指針の明示することが必要だという視点から研究を進めてきたという研究内容の説明がなされた。具体的には、①バイエルに変えて編集の工夫がされているテキスト（へ長調・ト長調の曲を早い時期に配置、コードネームの知識と奏法が無理なく身につくよう配慮されている等々）を選択したこと、さらに②そのテキストの教材曲を学生個々に適した段階から始められるように5つのグレードに分け、学生自身がどのグレードから学習するか選択できるようにしたこと、さらには③MLによるピアノの学習を始める2年次になる以前、1年次から準備・予習が始められるように、ガイダンスを行い、めやすが持てるようにしたことなどが発表された。また前年度に行った授業アンケートで寄せられた「初心者が一年間に学習する教材曲数としては多すぎる」という回答に答えるため、グレード1～4に収められた曲については、自由に選択できることとしてみたなどカリキュラムを見直し、その効果を各種データをもとに検証・考察した結果が述べられた。

検証は、昨年度と今年度の春学期末の学生の進捗調査の結果をもとに行なった。学年始めの実態調査で自らの経験を「ピアノ練習経験なし」「バイエル前半程度」「バイエル後半程度」と回答した3つのグループで見た結果、①3つのグレードの平均では見直しの効果が見られたこと、②特にバイエル前半グループについては効果が顕著に見られたこと、しかし③ピアノの練習経験がないグループでは効果が認められなかったことが明らかになったという。

その原因については今後さらに精査し検討してみたいということであったが、学習に入る前にバイエルを予習しておくことで、その後の進捗により影響がもたらされることが確かめられたことも大き

な研究成果であったと発表が締めくくられた。学生の学習意欲を大切にしたいという指導理念に貫かれていることが印象的な発表であった。

研究発表⑥ 地域に広がる電子キーボードによる音楽活動

坂本 明子 (坂本音楽教室)

本発表では、「地域への音楽発信」として電子キーボードを核とした地域における数多くのミニ・コンサートやふれあいコンサート、音楽療法実践の中から、いくつかのステージや活動の様子が VTR で紹介された。そこでは、歌やアコースティックな楽器（フルート、ヴァイオリン、サクソ、鍵盤ハーモニカ等々）と見事に融合した楽しいコンサートの様子を視聴することができた。また、大写しに放映した絵本（市販や独自の創作による）の朗読に合わせて奏される電子オルガンによる即興演奏による BGM の効果（豊富な音色による演奏が物語りにふさわしい世界を醸し出すなど）が、観客を物語の世界に無理なく誘いこんでいる様子なども VTR で示された。

これらのコンサート後の聴衆から寄せられたアンケートの内容からは、電子キーボードに対する拒否反応は窺えず、生演奏をする楽器として無理なく受け入れられているとの指摘もなされた。これは、近年とみに増加している「打ち込み」によるバックিংに合わせて演奏するという手法を排除し、他の奏者や歌手、あるいは語り手と息を合わせて演奏するという即時的なスタイルを重視していることに依るのだろうということが発表されたが、これは今後の電子楽器の演奏を考える上で、すこぶる示唆に富んだ「実践に裏付けられた」意見であるように思われた。本来、電子楽器であると言えども、人間の息吹が感じられる「Musical Instrument（音楽する道具）」として認識し、演奏に活かしていくという姿勢がベースにあるべきで、そこにこそ電子楽器の存在意義や活用する意義もあるのかも知れないし、そのことによってこそ社会的に楽器としての位置を確保していけるのかも知れないということを改めて考えさせられる研究発表であった。

これらの実践を通して、音楽が人に寄り添っていけるようなあたたかさを持つことが必要だと実感したということ、そしてそのためには音楽の応用力やアレンジの力、即興性を身につけていかなければならないだろうとのコメントで発表が締めくくられた。

本来、電子キーボードについて考えることは「音楽とは何か」「音楽で表現するとはどういうことか」について考えることに他ならないが、その意味で音楽と電子キーボードとのかかわりについて広がりのある視点からの「示唆に富む指摘」がなされた発表であったように思われる。

研究発表⑨ 社会の多様化に対応した M.L.活用による音楽教育を考える

森 直紀、森崎 貴敏 (昭和音楽大学)

本発表では、まず昭和音大では多様な科目において M.L.機器を活用した授業が行われているという実践の様子が述べられた。その授業時数は週に約 59 コマにもものぼり、ほとんどすべてのコースで M.L.による授業が行われているということである。ここでは、M.L.活用による授業を担当する指導者及びそこで学習する学生を対象としたアンケートの実施とその結果の検証・考察に立った「より効果的な活用をめざした展望」が語られた。

指導者を対象としたアンケート調査では「M.L.活用の有効な点」及び「活用の課題と対処策」、学生を対象としたアンケート調査では「M.L.は音楽教育に役立つか」「現在の M.L.の施設に満足しているか」「M.L.は十分に活用されているか」などについて詳細に考察を行った結果について、述べられた。

特に、指導者から挙げられた M.L.活用のメリットとして、学生が自分のペースで個別学習が可能なこと、学生への個別対応が容易になることなどへの回答が多かったことが発表されたが、一方では課題としては学生の手元を視覚的に確認することの必要性を痛感していること、履習者数の増加にどう対処するかに苦慮しているといった直面している課題についても述べられた。

学生を対象としたアンケート調査では、「満足」「やや満足」を合わせて 88.8%という高い評価が寄せられ、特に複数の小教室での少人数による学習に対する評価が高く、M.L.活用の意味を再認識することができたという。最後にこうした結果を踏まえ、専門教育さらには音楽の基礎教育の両面で M.L.が教育効果を有することを社会的に啓蒙すると同時に、その機能を十分に発揮し得るカリキュラムの作成の検討を進めて行きたいと発表を締めくくられた。

この分科会では、特に M.L.の授業カリキュラムの構成にかかわって、使用するテキストのことが話題になったことから、最後には本学会として M.L.の効果をより期待できるような標準的なテキスト、望ましいテキストの検討や編集・作成をしてはどうか、という提案などもなされ、学会としての動きを求める建設的な働きかけも胎動しつつあることが窺えた。

研究コンサートレポート ～ハイブリッド・オーケストラのもつ可能性を多方面より提示～

阿方 俊

研究コンサートは毎年、会場校の特長を活かした内容で行われているが、今回は全日本吹奏楽コンクールで金賞や銀賞を数多く受賞している文教大学の吹奏楽部と音楽専修生の電子キーボード（弦楽器担当）によるハイブリッド・オーケストラが披露された。ハイブリッドとは意味は異種混合ということであり、ここではアコースティック楽器と電子楽器によるオーケストラを意味する。

ここでの狙いは、ハイブリッド・オーケストラによるオーケストラ作品へのチャレンジにあり、コンサートではそれぞれ趣の違う次の4作品が取り上げられた。

<プログラム>

1. モーツァルト フルート協奏曲ニ長調 K.V.314 第一楽章
フルート 相原 唯 指揮 鯉沼かすみ
2. シベリウス 交響詩「フィンランディア」
指揮 戸澤 考聡
3. シューベルト／ベルリオーズ編「魔王」 バリトン 西 義一 指揮 松岡 剛史
4. 柳田 孝義ピアノ協奏曲第3番「Air varie」
ピアノ 松岡 剛史 指揮 仲条 幸一

ゲスト：西 義一（文教大学教授）

管打楽器：吹奏楽部有志 26名

電子キーボード（弦楽器、フルート）：音楽専修柳田ゼミ 4年次生 9名（相原 唯、石崎可奈、鯉沼かすみ、杉田綾子、高木由美子、戸澤考聡、飛田陽子、仲条幸一、松岡剛史）は、ソロおよび指揮も担当

司 会：初山正博（日本電子キーボード学会幹事）

使用楽器：ヤマハ・キーボード／PSR-S700 PSR-S900 コルグ・シンセサイザー／M50
ローランド・シンセサイザー／JUNO-G スズキ・低音オルガン／EB-3000

演奏で注目されることに、電子キーボード、フルートおよびピアノソロ、指揮を担当した学生が、特別なレッスンを受けない自主的練習で立派に演奏したことが挙げられる。これは M.L.教室（電子ピアノ）の活用でスコアリーディングやアンサンブルといった幅広い実践的応用力が身についているから可能だったのではなかろうか。

それに加えて特記されることは、当日使用の一段電子キーボードがコンサート前の10日余りしか借用できなかったことである。結果として、エクスプレッション・ペダル（音量増減用のペダル）やレジストレーション（音色設定）に関する不慣れな点もみられたが、むしろ10日余りという短時間でコンサートにまで漕ぎつけたことに賛辞を送るべきだろう。演奏は、日本電子キーボード学会ホームページの沿革で視聴できる。<http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/>

今回の試みは、将来の吹奏楽のあり方のひとつの方向性を提示したという点では貴重なものであったといえるだろう。終りに吹奏楽の人たちがどのように感じたのかアンケート回答を載せておきたい。

1. はじめての試みとしてどのように感じたか

- ・ 電子キーボードの方が音程や音の出だしも正確ですが、やはり全て生の楽器での演奏が個人的にはいいなと思いました。(CB)
- ・ 電子キーボードと管楽器の融合は初めての体験。全くどんな風に演奏すればよいかなど分からず戸惑ってばかりだったが、よい体験ができたと思う。(Ob)
- ・ 電子キーボードとのバランスが難しかったが、新鮮で楽しかった。(Tb)
- ・ ピッチやタイミングを合わせるのが大変だったけれど、新しい試みで楽しかったです。(Cl)
- ・ 電子キーボードと管楽器という演奏形態を初めて体験したので、とても新鮮に感じた。正直、最初は少し難しい試みなのではないかと思っていた。(Cl)
- ・ すごくおもしろい試みだなと思いました。(Ob)
- ・ 電子キーボードと管楽器が同じステージで演奏できるとは思ってもみませんでした。電子で作られるクラリネットやファゴット音に違和感があり、合わせることに抵抗がありました。(Hn)
- ・ 新しい試みで新鮮でした。(Eu) ・ すごく新鮮でした。(Tu)
- ・ 最初のうちは不安でしたが、やっていくうちに徐々にオーケストラのサウンドに近づいていけたような気がします。(CB)
- ・ 電子キーボードと管楽器の融合というなかなか体験することのできない貴重な体験ができました。電子キーボードの知識がほとんど無い状態での参加だったので、電子楽器の機能の多さに驚きました。コンバス奏者として、とても勉強になりました。また、今後にとっても期待の持てる試みだと思うので、これからの発展が楽しみに感じました。(CB)

2. メリットと留意点

- ・ 曲の編成に必要な楽器が揃ってなくても電子キーボードの音の切り替えで補うことができること、また大きな舞台でなくても演奏できるところがいいと思います。(CB)
- ・ メリットは、少人数でも、オーケストラのサウンド感を表現できる。留意点としては、電子キーボードはあくまでも電子音。管はより一層耳を使って、電子キーボードに響きを寄せていかなければならないと思った。(Ob)
- ・ 安定性？(Tb) ・ 弦楽器をもっていなかったり、難しくて演奏できない場合でも、電子キーボードだと可能かもしれない。(Cl)
- ・ 電子キーボードに管楽器が合わせるのが大変だった。(Ob)
- ・ メリットは、電子キーボードだと和音などが一定に出せて、息の強さで変わってしまう管楽器と違いブレないことです。最終的には成功したので良かったのですが、音の強弱やビブラート操作に工夫がないと、管楽器と合わないのが留意点だと思います。(Hn)
- ・ 電子楽器なので、音程などすぐに合わせやすかったです。(Tu)
- ・ メリットとしては、電子キーボードなので音程がある程度正確に出せるという点が挙げられると思います。しかし、電子キーボードの音量（管とのバランス）やビブラートなど、全て手で調節しなければならないので大変だと感じました。後は、音を出すタイミングを合わせるのが難しいと思いました。この点においては通常のオーケストラの方が合わせやすいように思います。(CB)
- ・ 管楽器では、ある程度の技術を要するハイトーン、ヴィブラート、ダイナミクスなどが電子キーボードでは簡単にできてしまうので、音をもっとブレンドすれば、とても安定感のある演奏になるように思います。留意点としては、電子キーボードと管楽器の音がうまくブレンドしないということだと思います。電子キーボードは、やはり機械のような音になります。(CB)

3. 今後の課題

- ・ 管楽器と電子キーボードとのバランス(Tb)
- ・ やはり電子キーボードと管楽器でのタイミングを合わせる事だと思います。(Cl)
- ・ 電子キーボードを弾く方にも管楽器の奏者が音を出す時に息を吸うようにブレスを考えて演奏していただけたら、もっと良くなるのではないかと感じました。(Hn)
- ・ 発音の違いとか?(Tu)
- ・ 電子楽器を用いて表情のある演奏をするのはなかなか難しいのではないのでしょうか。もしできるとしても、やはり通常のオーケストラの演奏と比べると少し違和感があると私は演奏して思いました。音楽の流れは指揮を見て分かる通り、常に自然体でないと気持ちよく感じられないと思うので、その点でやはり人工的なものが入ると少し崩れてしまうのではないのでしょうか。(おそらく、何度も何度も練習すれば、少しは改善されると思いますが) (CB)
- ・ 電子キーボード奏者は、キーボードでどのように表現をつけていくかを研究していくことが必要だと感じました。コントラバスとして参加していて、キーボードでは、音の強弱、ヴィブラートはできても、それ以上の表現をするのは、むずかしいように思いました。管楽器のようなフレーズの歌い方(自分の息で演奏しているように)ができれば、もっとよい演奏になるのではと感じました。(CB)

4. ご自由に

- ・ 貴重な体験、ありがとうございました。おつかれさまでした。(Ob)
- ・ 演奏してみて感じたことは、音程がずれてしまうとまずいこと、スピーカーを置く位置によっては、電子キーボードの音が聞こえづらい。ホールの客席で、電子キーボードと管楽器の音色がどのくらい混ざって聞えているのだろうか、と思った。(Cl)
- ・ 一番最初に演奏した時は、電子キーボードの残響が残りすぎてしまって、管楽器と拍がずれてしまい、難しいなと思ったが、練習を重ねて次第にずれがなくなっていく。電子キーボードの弾き方の工夫がとても重要なのかなと思った。とても良い経験になりました。(Cl)
- ・ 貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。(Hn)
- ・ いつもと違った体験ができて楽しかったです。(Tu)
- ・ このような研究コンサートに参加させていただきありがとうございました。(CB)



ステージ上の一段電子キーボード

事務局からのお知らせ

1. 学会誌 Vol. 5 投稿者募集

学会誌『電子キーボード音楽研究』Vol. 5への投稿者を募集しています。実践記録やレポートなど、幅広い意見を載せていきます。今年度は5月の連休後に締め切りをしましたので、おおくの方々のご投稿をお待ちしています。詳細はホームページの学会誌投稿規程をご参照の上、事務局までお問い合わせ下さい。

原稿の種別および字数：電子キーボードを用いた音楽の演奏、創作、教育等に関する①研究論文（20,000字以内）、②研究報告（10,000字以内）、③会員の活動報告（5,000字以内）、演奏会批評や書評（2,000字以内）、講習会報告、④会の内外の活動や情報についてのレポート。

投稿者：原則として会員とする。ただし依頼原稿執筆者はこの限りでない。

*ご執筆前に事務局に書式見本をご請求下さい。

2. 第6回全国大会の日程が決定

第6回全国大会の日程が次のように決まりました。大会スケジュールは例年のものを踏襲する予定です。研究発表など早めにお申込ください。

と き：2010年10月10日（日）

と ころ：昭和音楽大学南校舎 神奈川県川崎市麻生区南麻生1-11-1

小田急線新百合ヶ丘下車4分 新宿から快速急行で23分

内 容：詳細未定

3. 学会メール情報

会員情報などをメールでお知らせをしています。メールアドレスを登録していない方、また今まで会員情報などを受け取っていない方は事務局へご一方ください。

4. イスメ世界大会 in 北京 2010

音楽教育のオリンピックとでもいえるイスメ（International Society for Music Education/国際音楽教育学会）の世界大会が8月1日から6日まで北京で開催されます。全国大会でも紹介されましたが、昭和音楽大学電子オルガンアンサンブルが招聘され、8月5日と6日、中国音楽学院、8月8日には天津コンサートホールで演奏します。チラシが同封されています。

《編集後記》

今回の全国大会報告号は、第5回というとひとつの区切りの年であったわけですが、事務局担当者としては、あっという間に過ぎ去ってしまったという感じです。振り返ってみると、いろいろなことが走馬灯のように頭の中を回ると同時にマンネリ化しつつあり、今後クリアしていかなければならぬ課題もみえてきたように思います。

一方において、イスメ世界大会への参加もそうですが、3月18日、エレクトーンシティでウィーン国立音大ピアノ科のステファン・メーラー教授がベートーヴェンのピアノコンチェルトを電子ピアノで、しかも電子オルガンアンサンブルとの共演で演奏するというインターナショナルなコンサートがありました。

私たちの視野拡大のために会員諸氏の投稿や編集など積極的参加をお待ちしています。（阿方）